

「青山社会情報研究」発刊にあたって

青山学院大学社会情報学部 学部長 魚住清彦

2003年4月に青山学院大学は相模原キャンパスを開学し、1982年以来厚木キャンパスで学んでいた理工学部の1年生および文系学部の1、2年生と、世田谷キャンパスで学んでいた2年次以上の学部生、大学院生など理工学部・研究科の全学生が、建物・設備を一新した相模原キャンパスに集結した。その際に掲げられたフレーズが「文理融合キャンパス」であった。文系の1、2年次生と理工学部全学年が同じキャンパスで学び、文系、理工系の教員がともにいるキャンパスというのが実態であった。相模原キャンパス開学の決定に伴い、文理融合のキャンパスを標榜するためにはその精神を具現化する学部、ないしは理工学部とともに相模原キャンパスに全課程をおく新設学部を検討する委員会が設置された。当時理工学部長を担当していた小職は、新設学部を検討委員会のメンバーでもあった。しかし、具体的な新設学部として実を結ぶことはなかった。新日鐵の研究所の跡地、國學院大学の野球場、体育館などを譲り受け、相模原キャンパスが整備された。質量ともに充実した理工学部の施設設備と厚木キャンパスの機能を盛り込んだ新しい諸施設が整えられたが、新設学部の方向が決まらず、将来の新設学部のスペースが用意される余裕は無かった。

2008年4月、相模原キャンパスに全課程を置き文理融合の考え方を具現化する社会情報学部と、青山キャンパスを中心に展開する文社融合の総合文化政策学部の二つの学部が誕生した。1982年に設置された国際政治経済学部以来、実に26年ぶりの新設学部である。この間、国際マネジメント研究科、法務研究科、および会計プロフェッション研究科と専門職大学院は新設されたが、大学の学部には大きな動きが無く、他大学が大学生き残りをかけて、いろいろな形で学部改組、新設など、大学改革に動く中で青山学院大学は動きが鈍いといわれる状況が続いた。社会情報学部は理工学部で検討された、いくつかの学部案のうちの一つが全学的な委員会で採択され、実を結んだものといえるが難産であった。改組届け出で発足した本学部が学内的に正式に理事会で承認されたのは、2007年3月、そして2008年4月に文部科学省に届け出申請をし、7月に受理された。武藤学長のもとで、3人の副学長うちの一人を務めた小職が大学執行部のなかから社会情報学部の開設準備の責任者となり、発足にあたり学部長を担当することとなった。

発足第1年目の年度末を迎えるにあたって、社会情報学部教員による「青山社会情報研究」第1号がここに発刊されることを喜びたい。文系、理系の壁を越えた本学部を構成する教員には人文系、社会系、理工系の教員が集まっている。それぞれの教員がそれぞれの専門を生かした研究の成果の一部が本紀要に掲載されている。各分野の文化の相違は、論文のスタイルにも現れているかと思う。「論理的思考」「数理的な素養」「情報の高度な活用」および「豊かなコミュニケーション能力」の4つの力をつけさせることを目標に、現代の社会で要請されている「社会人基礎力」ないしは「学士力」の基礎の部分は特色ある英語教育、数学、および情報の教育など実践の場でスタートしている。これらの「基礎力」を身につけた学生をいかに社会情報学部ならではの「専門教育」につなげていくのかが問われている。社会情報学部の学生とともに歩む中で、青山学院大学の社会情報学部ならではの研究成果が本誌に掲載される日の近いことを願う。